

徳島県の学力における課題解決と学力向上に向けた取組（小学校）

—全国学力・学習状況調査及び徳島県学力ステップアップテストを活用した授業改善の推進について—

学校経営支援課 木村麻紀子 大西 愛子

要 旨

これまでの全国学力・学習状況調査（以下、全国学力調査）及び徳島県学力ステップアップテスト（以下、ステップアップテスト）の調査結果の分析から成果と課題を明らかにし、その課題解決のため授業改善の方策や具体的な授業アイデアを研修等で提案してきたことを述べる。

キーワード：全国学力・学習状況調査、徳島県学力ステップアップテスト

I はじめに

教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況の分析、成果と課題の検証、その改善を図ることを目的として全国学力調査が平成19年度から始まった。これを受け、本県では、平成21年度から本県独自のステップアップテストを実施し、児童生徒の学力や学習状況の把握及び課題解決に向けた取組を進めてきた。これまでの全国学力調査の結果においては、学習活動を支える基礎的・基本的な知識及び技能の定着に一定の成果がみられているが、知識及び技能を活用して課題を解決する力の定着には課題を残している。継続してステップアップテストを実施することにより、各学校における取組や指導法を振り返る機会とし、教育活動や学習指導の改善・充実を促進している。

本研究では、ステップアップテストを実施している第4学年・第5学年と全国学力調査を実施している第6学年について、学力向上の取組の成果と課題について考察を行うものとする。

1年目は、これまでの全国学力調査及びステップアップテストの調査結果を見直し、改善されている課題や固定化されている課題等を分析し整理した。本県の児童の強みを生かし、課題を克服していくための授業改善の方向性について研究した。

2年目は、令和4年度の全国学力調査及びステップアップテストの調査結果を分析し、課題の共通理解とその改善に向けた学習指導の在り方について考察するとともに、タブレット端末を活用した事例について研究した。

II 研究仮説

全国学力調査及びステップアップテストの調査結果から、明らかとなった課題とその改善に向けた取組や授業アイデアの提案を研修会等で行い、実践されることで、学力向上が図れるであろう。また、ICTを活用した事例を学力向上の手立てとして提案することで、ICT活用の推進が図られるであろう。

Ⅲ 研究の実際

第4学年・第5学年における過去3年間の調査結果を分析・整理した上で、本県の児童の強みを生かし、課題を改善していくための取組や授業アイデアの提案を研修会等で行った。

1 小学校国語における取組

(1) 全国学力調査及びステップアップテストにみられる本県の特徴

① 知識及び技能

表1 全国学力調査正答率(H31~R4)

	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	知識及び技能 (令和3年度は言語事項)
平成31年度	73.5 (+1.2)	54.0 (-0.5)	81.6 (-0.1)	52.2 (-1.3)
令和3年度	74.6 (-3.2)	57.8 (-2.9)	45.8 (-1.4)	68.3 (±0)
令和4年度	63.8 (-2.4)	44.1 (-4.4)	62.7 (-3.9)	71.0 (+0.5)

※ 令和2年度は全国学力調査は実施されていない。
※ () は、全国との平均差を示す。

過去3年間の全国学力調査のデータ(表1)を経年で振り返ると、上昇傾向がみられる。また、ステップアップテストにおいても、漢字を書いたり、主語を捉えたりする知識及び技能を問う問題において、上昇傾向がみられた。

② 思考力、判断力、表現力等

複数の情報(叙述)を関連付けて書くことにおいて課題がみられる。全国学力調査では、平成31年度に「目的や意図に応じ、複数資料を関連付けて、自分の考えや理由を明確にし、まとめて書く」問題が出題され、正答率は26.9%(全国28.8%)と課題が残る結果となった。令和3・4年度の結果では、「読むこと」「書くこと」領域の、複数の情報から目的に応じて引用したり、考えを表現したりすることには依然として課題がみられる。

(2) 令和4年度のステップアップテストの結果

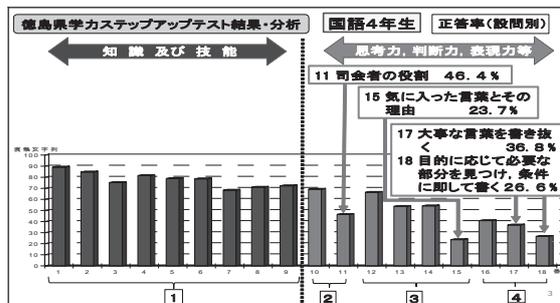


図1 令和4年度ステップアップテスト(小4)の設問別正答グラフ

【第4学年】

知識及び技能を問う問題の正答率が高い。一方で、話し合いや記述式問題において、司会者の役割を理解したり、目的に応じて必要な部分を見付け、条件に即して書いたりすることに課題がみられた。

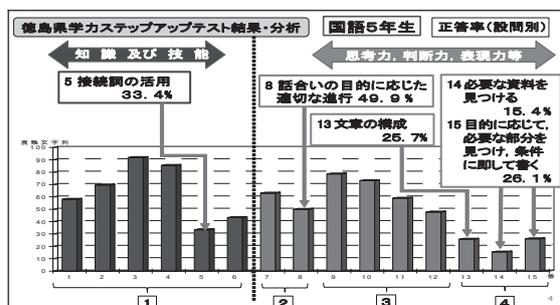


図2 令和4年度ステップアップテスト(小5)の設問別正答グラフ

【第5学年】

知識及び技能を問う問題は正答率が高く、漢字や送り仮名を問う問題の正答率は8割を超えている。一方で、文章の構成を問う問題、必要な資料を見付ける問題、目的に応じて必要な部分を見付け、条件に即して書く問題に関しては、課題がみられた。

(3) ステップアップテストの問題及び解説

ステップアップテストの活用問題の一部を紹介し、解説することとする。

問題例

資料を基に、科学新聞をつくり、学級の友達に紹介する言語活動を設定した問題である。科学新聞をつくるために、自分の目的や意図に応じて必要となる情報を資料から捉え、抜き出して、条件に従って記述することで本県の課題を調査する問題である。

その結果、「構成を問う」問題においては25.7%,「2つの資料を比較し解答する」問題においては15.4%,「資料を基に感想をまとめる」記述問題では26.1%の正答率であった。記述問題は、選択問題に比べると低い正答率であった。



図3 令和4年度ステップアップテスト(小5)の問題例

(4) 課題解決に向けた取組

① 学力向上推進員研修会において

学力向上推進員研修会では、ステップアップテストの分析結果を伝え、学校全体で課題解決に向けた取組ができるように研修を行っている。次は、令和4年度の研修での伝達内容である。

- ア 基礎基本の重視
- イ 言語活動の土台づくり
- ウ 話し合いにおける学習活動
- エ 授業改善のポイント

複数の資料を関連付けて解答する問題について、研修を通して解説する(図4)とともに、複数の資料から必要な情報を収集する時のポイント(図5)を示して説明を行った。

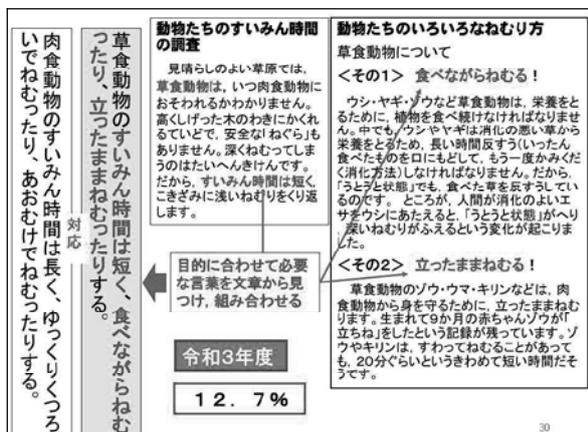


図4 ステップアップテストの解説

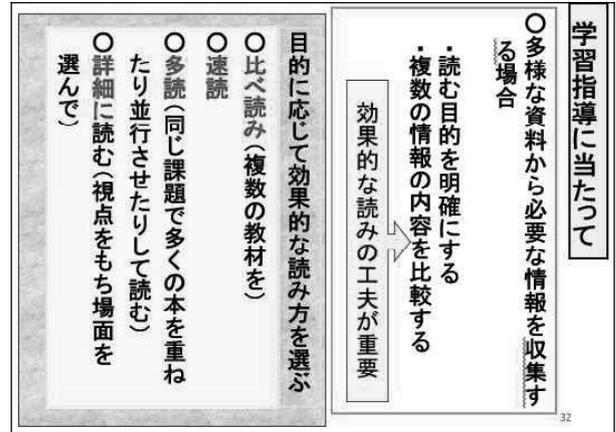


図5 授業改善のポイント

また、全国学力調査、ステップアップテストの調査問題を活用した授業改善を紹介している。(図6, 図7)

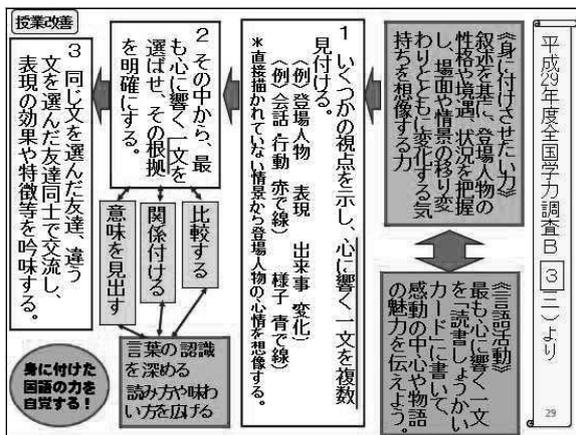


図6 調査問題を活用した授業改善

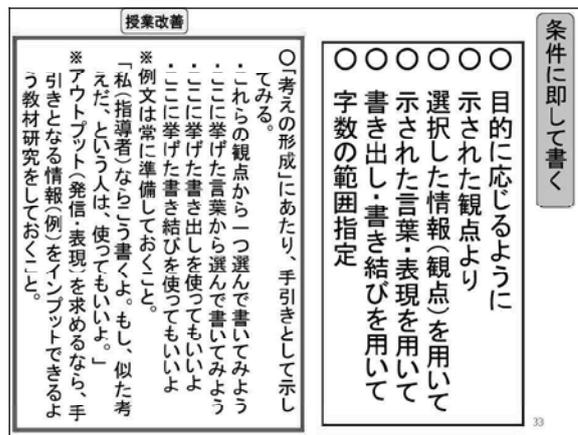


図7 授業改善のポイント(条件に即して書く)

② 授業づくり研修会において

各学校から参加した教員に対し、全国学力調査及びステップアップテストの調査分析から課題を示し、学力向上のための授業アイデアを提案している。研修会で提案したICTを活用した授業アイデアについて一部紹介する。

ア 授業アイデア例「話すこと・聞くこと」

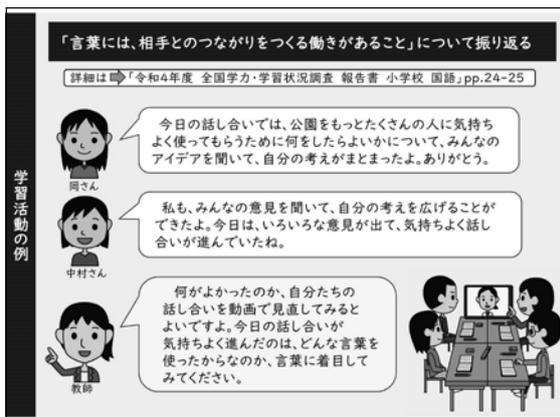


図8 ICT活用事例(話すこと・聞くこと)



図9 ICT活用事例(話すこと・聞くこと)

ICTを活用して発表や話し合いを撮影する事例は、県内からも多く挙がってきている。その中で、動画を撮ってはみたが、国語の資質・能力が育成されているかどうか判断がつかなかったなどの声が寄せられた。ICTを使ってはいるが、資質・能力の育成に効果的に働いていないということが課題として浮き彫りとなった。撮影した動画のどこを見せるのか、焦点化することができていないことが原因だと考えられた。

そこで、文科省から提案された事例(図8, 図9)を紹介した。これは、ICTを効果的に活用して指導の効果を高める工夫をした事例である。

これを基に、指導のねらいに応じて、振り返りの場面などで自分たちの話し合いの様子を確かめる場面を設定することが大切であることを説明した。また、子供の中に問題意識が醸成した上で話し方や聞き方を振り返る必要があることを説明し、ICTを活用するなどして言葉の働きについて自覚ができる場面を学習に位置付けると効果的であることを伝えた。

イ 授業アイデア例「書くこと」

「自分が書いた文章をよりよいものにするために、推敲する」という設定で、ICTの利点を生かして推敲する授業を提案した。(図10, 図11)。これは、本県の課題の1つである「文章の構成を問う問題」及び「書くこと」の課題解決に向けた授業アイデアである。「なるほどこう書けばよいのか」といった成功体験を積み重ね、書くことへのハードルを下げることをねらいとしている。

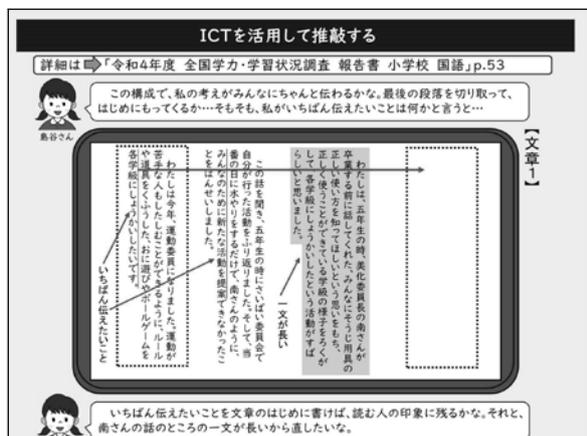


図10 ICT活用事例（書くこと）

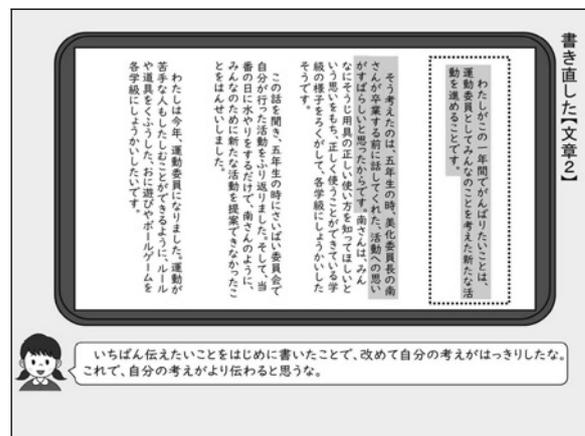


図11 ICT活用事例（書くこと）

ウ 授業アイデア例「読むこと」

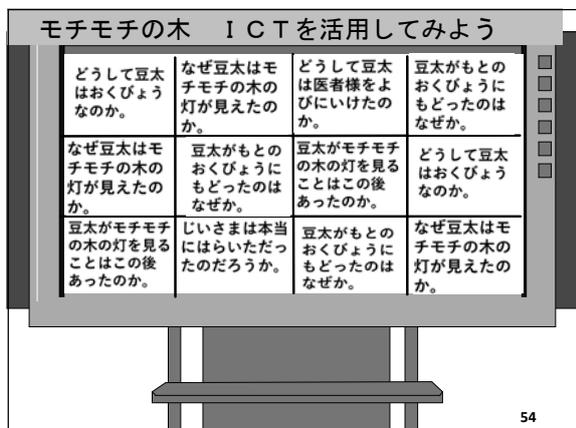


図12 ICT活用事例（読むこと）

「問いの立て方が分からない」という現場の先生の声を基に、模擬授業を行った。ICTを活用して子供たちの初発の感想から問いを立て、子供たちの問いから学びが始まっていくという授業構想である。本気になって考えることができる問いは子供たちの主体性を育む鍵である。低学年では、一緒になって考えていき、中学年では、子供たちから出てきた問いを整理する。ICTを活用して全員の感想を共有し、子供たちと整理しながら、軸となる問いを決定する事例を提案した。(図12)

また、問いを解決するためには、複数の叙述を根拠に、より具体的に登場人物の性格を思い描くことが重要である。そこで、物語全体を見通すことができるような全文を掲載したシート（以下、全文シート）を活用し、場面と場面を関係付けて複数の叙述を矢印で結んだり、どのように考えたのかを書き込んだりして、全体を捉えることを提案した。これは、本県の課題である「複数の情報に関連付けて理解を深める力」の育成にもつながる。これまでは、拡大した全文シートを黒板に掲示して一斉指導をしていたが、ICTを活用することで、一人一人がタブレット端末上の全文シートに書き込むことができるとともに、全体での共有が効果的に行える。より多くの友達と共有し、自分の考えや思いを広げ深めることが大切であると周知した。

2 小学校算数における取組

(1) 全国学力調査及びステップアップテストにみられる本県の特徴

表2 全国学力調査での全国平均正答率との差(H31~R4)

領域別			
	令和4年度	令和3年度	平成31年度
数と計算	+0.3	+1.2	数と計算 -2.0
図形	-1.9	+1.4	量と測定 -1.7
測定	該当問題なし	+1.0	図形 -1.4
変化と関係	-0.9	-0.4	数量関係 -2.7
データの活用	-1.2	-1.9	

観点別			
	令和4年度	令和3年度	平成31年度
知識・技能	-0.8	+0.2	知識・理解 ±0 技能 -3.7
思考・判断・表現	-1.2	-0.4	数学的な考え方 -1.2

形式別			
	令和4年度	令和3年度	平成31年度
選択式	-2.5	-1.6	-1.3
短答式	-0.6	+0.8	-2.6
記述式	+0.7	+1.0	-1.2

※ 令和2年度は全国学力調査は実施されていない。

領域別では、令和2年度より領域が改訂されたが、「データの活用」領域において、全国の平均正答率との差が縮まりつつあり、上昇傾向がみられる。しかし、まだ全国平均より1%以上、下回っており、現行の学習指導要領で新設された「データの活用」領域のねらいを継続して周知し、育成する資質・能力を明確にした授業改善を行う必要がある。「図形」領域においては、今年度初めてプログラミングを踏まえた問題が出題された。正答率はどの設問も全国平均を下回っており、算数科におけるプログラミングについては継続して「プログラミングを行うことが目的ではなく、論理的思考力を育成することが目的」であることを授業に反映させる必要がある。観点別では、「思考・判断・表現」において、全国の平均正答率を下回り、思考力、判断力、表現力等を育成する授業を展開しなければならない。形式別では、本県の課題であった記述式において、令和3年度からは全国の平均正答率を上回り、日々の授業で解決方法や根拠を記述する場が確保されていると考えられ、改善傾向にある。

(2) 令和4年度のステップアップテストの結果

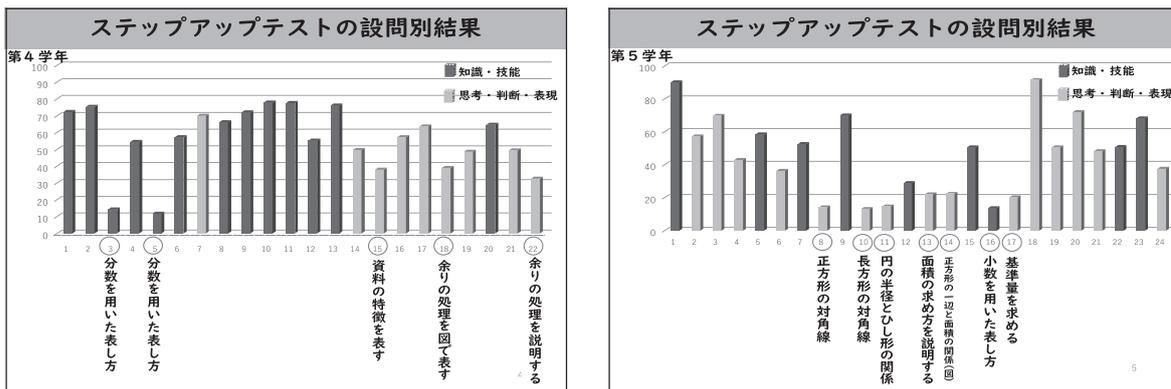


図13 令和4年度ステップアップテスト（第4学年と第5学年）の設問別正答率のグラフ

第4学年では、空位がある数の表し方、時刻と時間の関係、3位数の乗法の計算については正答率が高かったが、分数を用いた表し方や棒グラフから資料の特徴を表すことについて課題がみられた。分数の表し方については、もとにする大きさを意識できていないことが要因と考えられ、十分な理解に至っていない。また、資料の特徴については、集めたデータを表やグラフに表し、見いだしたことを伝え合う場を積極的に授業に取り入れる必要があると考えられる。

第5学年では、2位数×1位数の乗法の計算、表を与えられた場合の数量関係の捉えについては正答率が高かったが、正方形や長方形の対角線に関わる性質と円の半径を関連付けて考えることや面積の求め方を説明することについて課題がみられた。ICTを効果的に活用し、図形についての感覚を豊かにしながら資質・能力を育成することが考えられる。

(3) ステップアップテストの問題及び解説

(1) 次の表は、3年生のうち、1組と2組のいちばん好きな遊びの人数を表したものです。1組のうち、ドッジボールがいちばん好きな人は何人ですか。答えを書きましょう。

遊び	1組	2組	合計
ドッジボール	7	5	12
かくれんぼ	3	7	10
その他	1	4	5
合計			23

(2) なおみさんは、3年生のいちばん好きな遊びの人数を次のような棒グラフに表しました。このグラフや上の表を見て気がついたことについて、みんなで話し合ってください。

あきら：「ドッジボールがいちばん好きな人は、15人です。」
 とおる：「おにごっこがいちばん好きな人が10人います。」
 みらい：「かくれんぼがいちばん好きな人とドッジボールがいちばん好きな人の人数の和は、1人です。」
 なおみ：「3組のうち、かくれんぼがいちばん好きな人は、2人です。」

4人の中で、1人だけ発着の内ようが正しくない人がいました。発着の内ようが正しくない人はだれですか。1から4までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。また、その人の発着の内ようを正しく書き直しましょう。

1 あきら 2 とおる 3 みらい 4 なおみ

(3) とおるさんたちは、それぞれ目的にあわせて3年生と4年生のいちばん好きな遊びの人数を次のような棒グラフに表しました。

とおるさんのグラフ：3年生と4年生の人数を比較する。3年生はドッジボールが最も多く、4年生はかくれんぼが最も多い。
 みらいさんのグラフ：3年生と4年生の人数を比較する。3年生はドッジボールが最も多く、4年生はかくれんぼが最も多い。
 あきらさんのグラフ：3年生と4年生の人数を比較する。3年生はドッジボールが最も多く、4年生はかくれんぼが最も多い。

とおるさんは、どのような目的でグラフに表しましたが、次の1から3までの中からもっともふさわしいものを1つ選んで、その番号を書きましょう。

- それぞれの学年の中で、いちばん好きな遊びの人数をくらべたい。
- 遊びのしゅるいごとに、3年生と4年生のいちばん好きな遊びの人数をくらべたい。
- 遊びのしゅるいごとに、3年生と4年生のいちばん好きな遊びを合わせた人数をくらべたい。

いちばん好きな遊びについてアンケートを行い、表やグラフに整理し、見いだしたことを表現している場面である。

(1)表から必要なデータを読み取ること…正答率76.2%(2)棒グラフからデータの特徴を読み取ること…正答率49.6%、データの特徴を表すこと…正答率37.9%(3)目的によって棒グラフの表し方を考えること…正答率57.4%

図14 令和4年度 第4学年の問題例

様々な観点とそれに対応するグラフに触れ、そこから読み取ったことを伝え合う場を設定しており、また、目的に応じてグラフに表したり、主張によって適切なグラフの表し方が異なることに気付いたり、児童の統計的な問題解決活動が深まる授業を提案している。

(4) 課題解決に向けた取組

① 学力向上推進員研修会において

第4学年の分析

② 次のように、全体の長さが2mのテープを4等分しました。色のついたところの長さを分数を使って表したとき、①から⑤までについて、正しいものには○を、正しくないものには×をそれぞれ書きましょう。

2m

× 14.4% ① $\frac{1}{4}$ m
 ○ 54.5% ② テープ全体の長さの $\frac{1}{4}$ ←「テープ全体の長さ」をもとにしたとき
 ○ 11.9% ③ $\frac{1}{4}$ m ←「1m」をもとにしたとき

何を等分したのかを問う。

第4学年の分析

分数の意味 観点の置き方により様々な捉え方 解説p.153

3年

- ① 具体物を3等分したものの二つの大きさを表す。
- ② $\frac{2}{3}$ し、 $\frac{2}{3}$ mのように、測定したときの量の大きさを表す。
- ③ 1を3等分したものの(単位分数である $\frac{1}{3}$)の二つの大きさを表す。

5年

- ④ AはBの $\frac{2}{3}$ というように、Bを1としたときのAの大きさの割合を表す。
- ⑤ 整数の除法「2÷3」の結果(商)を表す。

分数の意味について、分数は観点の置き方により、様々な捉え方ができることを小学校学習指導要領(平成29年)解説算数編を用いて確認した。5つの捉えが記載されている。

図15 令和4年度学力向上推進員研修会で用いたスライド

算数科におけるICTの効果的活用については、「資質・能力の育成のために活用すること」を繰り返し説明し、使用することが目的にならないように周知している。

GIGAスクール構想のもとでの
 小学校算数科の指導においてICTを活用する際のポイント

算数科で育成を目指す資質・能力とICT活用の関係

○表やグラフが簡単にかける
 多量なデータでも、表計算ソフトを用いて、目的に応じていろいろなグラフを一瞬で簡単に作成できる。

○図形指導の充実
 プログラミングソフトを用いて正多角形をかくことで、プログラミング的思考力を育成する。図形を動的に変化させることで、図形に対する豊かな感覚を育成する。

図16 「StuDX Style GIGAスクール構想のもとでの小学校算数科の指導について」より

文部科学省「各教科等の指導におけるICTの効果的な活用に関する解説動画」で用いられている動的な図形作成ソフトを研修で紹介した。これまでの黒板や紙では不可能であった、図形を動的に変化させることが可能で、図形についての感覚を豊かにすることが期待できる。本センターのWebサイト/教職員支援・学校支援/教科等の指導に役立つ情報/小学校/算数のページでも作図方法例を掲載している。

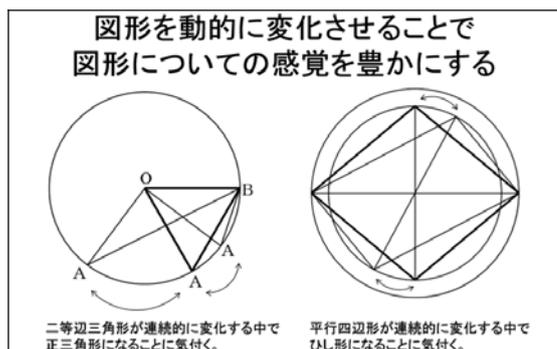


図17 算数・数学科におけるICTの効果的活用

～二等辺三角形が連続的に変化することで正三角形になることに気付く～

【作図例】
グリッド線などを消すときは、操作画面右上から

手順	選択するツール	選択するツールをタップしてから行う
1	中心点(円)の中心点	点Aから点Bまでドラッグ
2	点	点C、点Dをとる
3	多角形(三角形)	点A、点C、点D、点Aを順にタップし、つなぐ
4	移動	点Cなどの青い点をドラッグすると動かすこと
5	アニメーション	点D上で右クリック→アニメーションを選択すると一時停止するときは操作画面左下

～平行四辺形が連続的に変化することでひし形になることに気付く～

【作図例】

手順	選択するツール	選択するツールをタップしてから行う
1	同心円を2つ作る	
2	点A(中心)と点D、点Aと点Eをそれぞれ通る直線をひく	
3	交点Fと交点Gをタップする	
4	点D、点E、点F、点G、点Dを順にタップして結ぶ	
5	手順2でひいた2本の直線をそれぞれタップし、非表示にする	
6	点Dと点F、点Eと点Gをそれぞれタップして結ぶ	
7	点Eなどの青い点をドラッグすると動かすことができる	
8	点E上で右クリック→アニメーションを選択すると自動的に動く一時停止するときは操作画面左下	

～対角線の交点Oの位置を動かして面積を考察する～

【作図例】

手順	選択するツールをタップしてから行う
1	点A、点Bをタップし2点を結ぶ
2	点A、線分AB上をタップする 点B、線分AB上をタップする 点Cをとる
3	点C、線分AC上をタップする
4	交点Dをタップする
5	点Eをとる
6	点Eと線分AB上をタップ、点Eと線分AC上をタップする
7	交点Fと交点G、交点Gと交点H、交点Hと交点I、交点Iと交点Fをそれぞれ順にタップして結ぶ
8	必要でない直線をタップする。(何本でも)
9	点Aと点C、点Cと点D、点Dと点B、点Dと点F、点Fと点H、点Hと点Iを順にタップして結ぶ
10	点Eをドラッグすると動かすことができる

図18 作図方法例

児童が思考力、判断力、表現力等を身に付けるためには、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が必須である。算数科における主体的な学び、対話的な学び、深い学びを提示し、教師主導ではなく児童主体とした授業を推進している。

② GIGAスクール教科等研究集会において

ア 算数科におけるプログラミング教育について

小学校学習指導要領解説算数編の329ページには、「数量や図形についての感覚を豊かにしたり、表やグラフを用いて表現する力を高めたりするなどのため、必要な場面においてコンピュータなどを適切に活用すること。また、第1章総則の第3の1の(3)のイに掲げるプログラミングを体験しながら論理的思考力を身に付けるための学習活動を行う場合には、児童の負担に配慮しつつ、例えば第2の各学年の内容の〔第5学年〕の「B図形」の(1)における正多角形の作図を行う学習に関連して、正確な繰り返し作業を行う必要があり、更に一部を変えることでいろいろな正多角形を同様に考えることができる場面などで取り扱うこと。」とある。算数科における「プログラミング的思考」とは、自分が意図する一連の活動を実現するためにどのような動きの組み合わせが必要か、どのように改善していけば、より意図した活動に近づくのかということを論理的に考えていく力の一つである。要はプログラミングを体験しながら論理的思考力を身に付けることが目的で、コンピュータに意図した処理を行うように指示することができ

児童がいかにかに学ぶか	
①	児童の「はっきりしない」「困った」などから、本時の焦点化した問題を共有する。(教師から提示すると受動的になりやすい。)
②	集団解決時、児童同士が問い合うことができるようにする。教師と理解できる児童とのやりとりで終わらないように、分からない児童にかわって問い返しなどして、対話的な学びを促進する。数学的な表現(具体物、図、数、式、表、グラフ)を用いて、解決の過程をノートにかき込む時間を設けるなどして、共有する。(完成した式や図ではなく、完成するまでの過程を共有する。)
	「どう考えてこの図になったの?」 「なぜ、そうしようと思ったの?」
	「本当?」 問うことにより数学的な見方・考え方を顕在化する。
③	本時の目標が達成できたか、「なんとなく」ではなくノートの記述や適用問題の解決の様子など「子供の事実」で判断する。
④	児童に最後にもってほしい「振り返り」はどのようなものか。

図19 学力向上推進員研修会で用いたスライド

るという体験をさせることが大切であり、決してプログラミング言語などを覚えることではないことを確認した。

また、算数科の目標を踏まえ、数学的な思考力、判断力、表現力等を身に付ける活動の中で行うことを重ねて周知し、参考となる次のサイトを紹介した。「小学生を中心としたプログラミング教育ポータル」<https://miraino-manabi.mext.go.jp/content/111>

育成する資質・能力は、「プログラムを使って正多角形をかく方法を考えることができる」であり、本時の目標は、技能ではなく、論理的思考力の育成である。

授業構成例は、2時間構成で分かりやすく図で示されている。概要は次のとおりである。まず、児童は、物さしと分度器を用いて内角の大きさ、辺の長さを使って多角形をかくが、辺の数が多くなると正確にかくことが難しくなることを実感し、プログラミングを用いてかいてみることに進む。

教師が正方形をかく方法を伝え、児童がまねてかく場を設ける。次に、正三角形や正六角形を、正方形のプログラムの一部を変更してかこうとしてもうまくかけないことに児童が気付く、ここからがプログラミング的思考を育成する場となる。児童が試行錯誤しながら、自分が意図する一連の活動を実現するためにどのような動きの組み合わせが必要か、どのように改善していけばより意図した活動に近づくのかということ、図形の性質などを基に、論理的に考える場を必ず設定する。また、正八角形や正十二角形などを類推的に考えることへ進み、ここで図形が大きくなりすぎるという問題を発見し、歩数を調節する試行錯誤へと進む。

このように、進めば進むほど新たにつまずきが出てくるが、つまずきつつ、改善していくという体験がプログラミング的思考力の育成につながる。本時の振り返りでは、コンピュータに正しく命令さえすれば、どんな正多角形でも正確にかくことができるということに児童が気付くことができるようにする。つまり、どのようなプログラムにすれば正多角形がかけられるのか、「考える」ことにねらいがあることを教師が明確に把握することが重要である。

イ 「データの活用」領域について

この領域のねらいを問い、「代表値」「妥当性」「批批的」などのキーワードを確認した。また統計的探究プロセスは、P (problem) P (plan) D (data) A (analysis) C (conclusion)が問題、計画、データ収集、分析、結論を意味していることや、これらは一方向に進むものではなく、計画を立てながら問題を見直して修正を加えてみたり、グラフを作り直して分析したり、ときにはデータを集め直したりしながら、相互に関連し、行き来して進むものであることを周知した。

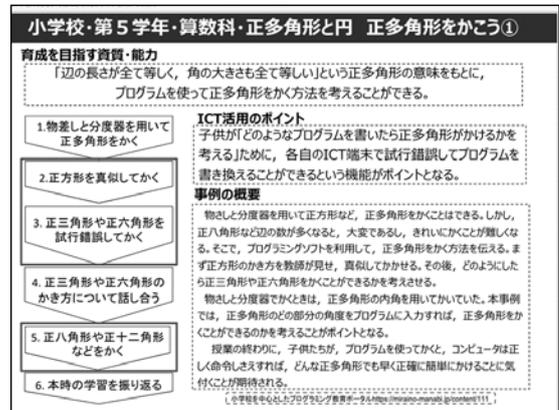


図20 「小学生を中心としたプログラミング教育ポータル」より



図21 統計的探究プロセス

IV 大学連携

全国学力調査の調査結果と分析について、また授業づくり研修会の内容等について鳴門教育大学教授より御指導、御助言をいただき、研修内容をより分析的で実践的なものに行っている。国語科においては、鳴門教育大学の幾田伸司教授、算数・数学科においては、鳴門教育大学の秋田美代教授に御指導、御助言をいただいた。

V アンケート結果

授業づくり研修会（令和4年10月26日・28日、11月8日実施） アンケート結果

研修後のアンケートから、「授業アイデア例を授業に取り入れようと思った」割合は99%を超えた。課題解決や学力向上のために手立てを講じようとする意識が高いことが分かる。一方で、周知の方法は「回覧」が最も多く、校内の共有方法を工夫する必要があると考えられる。

○アンケート回答の一部

質問1 「はい」と答えた人の取り入れたい具体的な授業アイデア例

- ・国語での「全文シート」はぜひ活用したいと思った。全体の文章を見渡すことで、教科書ではできない、一枚の中での「表現」のつながりを子供たちが見付けることができ、物語の面白さにより気付けると思った。
- ・国語科全文シート（ICTで）。今までは拡大コピーで出し、はり合わせて黒板に掲示して、ふせんに書かせて貼っていたが、ICTを活用する方が効率的だから。
- ・二学期後半に「大造じいさんとがん」の学習を行う際、全文シートを作成して登場人物の心情にせまりたい。
- ・全文を一枚ものにして授業をしている。まさしく今説明文の単元ですが、線を引いたりして、全体構成や相互関係が見通しやすい。
- ・文章を一枚ものにまとめた資料を配付することで、ノートとして活用ができ、かつICTを活用することで全体での共有が効果的に行えるため、実践に生かしたい。
- ・学習の状況に応じて、教師が伝え合う活動に参加し、児童から良いところを引き出したり、児童の発言を価値付けたりすること。
- ・話し合いにおいて、ICT等を活用して、目的に合った方法で情報を整理するというのは、視覚的にも分かりやすく、話し合いを通して得たことに気づきやすいと思ったので、取り入れていきたい。
- ・全国学力調査の問題を学年便りに載せたいと思った。1月上旬に「割合」を学習後、家庭と連携を図り、生活経験の中から問題解決できるようにしていきたい。
- ・割合を生活経験と関連付けて図に表して考える。
- ・グラフを活用しながら学校のイベントを考えていくと、様々なアイデアがみられておもしろいと思った。
- ・プログラミングを用いて、論理的思考を表現できるようにしていきたい。
- ・GeoGebraが効果的だと思ったので活用したい。

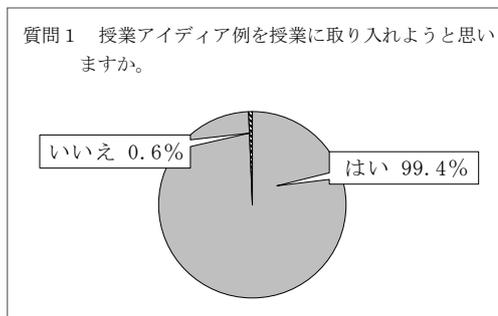


図22 「令和4年度授業づくり研修会」質問1のアンケート結果

- ・学習パラダイムの転換を意識する授業設計を行う。
- ・考えた理由を伝えられるように、「なぜ」と根拠を問うたり着目するところを明確にしたりするという例を取り入れたい。

質問2 「はい」と答えた人の具体的な周知方法（複数回答）

- ・回覧83人 ・研修50人 ・終礼41人
- ・学力の研修で周知または学力担当に伝える11人
- ・若手（メンター）に伝える9人
- ・コピーして配付3人 ・実践して見てもらう2人

※伝達はしたいが、研修は計画されているので、改めて伝達する時間をとってもらうのが難しい。

質問3 「はい」と答えた人の具体的な活用方法

思考ツールでまとめる、話し合い（動画）、作文推敲、新聞、リーフレットづくり、漢字学習、グラフや図形を操作する、面積の求め方を書き込む、プログラミング、デジタル教科書、学習ドリル、実験や観察の記録、作品の鑑賞、体の動きやチームの動きの確認、プレゼンテーション、アンケート作成、調べ活動、共有、まとめ・発表、共同編集、他校とのコミュニケーション等

質問4 「はい」と答えた人の具体的な振り返りの内容

- ・本時のまとめを載せたり感想を書かせたりする。またできるようになったことやもっと知りたいことなどを書かせる。
- ・本時に学習したことで分かったこと、初めて知ったことやもっと知りたい点、新たな疑問点などを次の時間の布石にしている。
- ・分かったことだけでなく、分からなかったことも振り返る。
- ・どのようにすれば分かったのかを書く。
- ・気づきや新たな疑問、これまでの学習と結び付けてどうか、今までの自分と比べてどうか。

質問5 「自由記述」

- ・学びはつながっているものだと思うので、自分の授業で今日のアイデアを取り入れることはもちろん、先生方とも共有して、子供の学びをよりよいものにしたい。
- ・記述する力、考える力を身に付けるための方策を教えていただき良かった。教師主導になりがちなので反省し、改善していきたい。
- ・「モチモチの木」の模擬授業により、叙述を基に、自分の意見を考えさせるイメージができた。
- ・学び合いによって考えの深まり、高まりを行っていくことが重要だと感じた。どうしても教師主導で授業をしてしまうので明日から意識改革をしていき、子供たちに力をつけていきたい。
- ・児童にとって、日々行っている授業が生活につながっていくものにしないといけないと改めて思った。

質問2 本研修内容を校内で先生方に周知しますか。

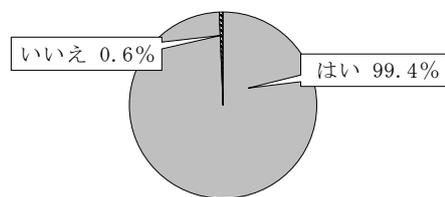


図23 「令和4年度授業づくり研修会」質問2のアンケート結果

質問3 タブレットを授業で活用する機会が増えましたか。

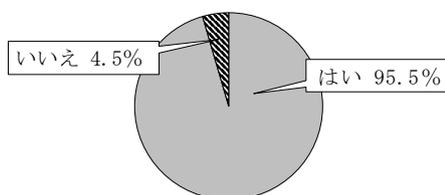


図24 「令和4年度授業づくり研修会」質問3のアンケート結果

質問4 国語科と算数科の授業において、学びの振り返りを行っていますか。

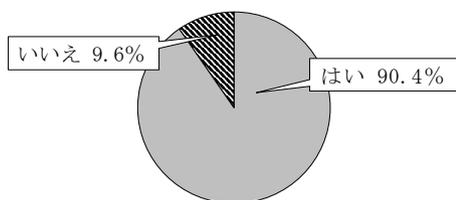


図25 「令和4年度授業づくり研修会」質問4のアンケート結果

VI 研究の成果と今後の課題

本県の特徴として、「書くこと」、特に根拠や理由を明確にし、自分の考えをまとめることにおいては依然として課題がみられる。しかし、令和4年度全国学力調査における記述する力を問う問題では、本県の無答率は全国と比較しても低いことから、自分の考えをまとめようとする意欲があることが伺える。また、国語科においては、現場の授業において、理由や根拠を明確にして、自分の思いや考えを書く場面を増やすなどの授業改善がみられた。算数科においては、令和3年度・4年度において記述問題の正答率が改善方向にある。これは、書くことに課題がみられるとし、授業改善に向けて学力向上推進員研修会や授業づくり研修会等において、継続して改善の手立てを伝えることを行ってきた成果ではないかと考える。アンケート結果からも研修内容を校内研修を通して伝えていると回答した参加者の割合は高く、学校全体にその趣旨が伝わっているのではないかと考える。実際の授業においても、研修会を通して周知したICT活用や振り返り等が授業改善として取り入れられている様子も伺える。その半面、参加者のみの研修になってしまい、管理職や他の教職員に伝わっていない例もある。学力向上推進員研修会や授業づくり研修会では、課題は該当学年のみではなく、学校全体で共有し、系統性を意識した組織的な学習指導の改善・充実につなげることが肝要である。そのためには、これらの調査分析が子供たちの学びにおける課題を捉え、一人一人のつまずきを解決していく上で重要な意味をもつということに参加していただいた教員のみならず全ての教員から理解と納得を得られるようにする必要がある。今後、研修のもち方や周知の仕方を見直し、改善を図っていくことが課題である。

VII おわりに

全国学力調査やステップアップテストは、子供たち一人一人のつまずきに気付き、手立てを講ずるものである。その趣旨を踏まえ、主にICT活用の研究を進め、研修会等において、様々な事例を学力向上の手立てとして取り上げてきた。研修後のアンケートからは、紹介した実践例を基に活用してみたいという意見が多くみられた。しかし、これらはあくまでも一例である。大事なことは、目の前の児童の学習の状況に応じて授業を工夫することである。学習の中で、どのように活用すれば一人一人が有効に学びを深め広げていくことができるか、丁寧に考えて授業を構想することが肝要である。このことを念頭に、現場の教員に、課題解決に向けた授業改善の提案や、実践可能な学力向上の具体的な提案を行っていききたい。

参考文献

- ・文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年度告示）』解説（国語編）（算数編），2018年
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『全国学力・学習状況調査解説資料（小学校国語）（小学校算数）』，2022年
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『全国学力・学習状況調査報告書（小学校国語）（小学校算数）』，2022年
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校国語）（小学校算数）』，2019年